

「セルフ・エスティーム」の概念と測定法の再構築

——セルフ・エスティーム研究刷新への黎明——

山崎 勝之*, 横嶋 敬行**, 内田 香奈子*

(キーワード: セルフ・エスティーム, 自律性, 非意識, 測定, インプリシット心的特徴)

現行のセルフ・エスティーム研究の問題に至った背景

個人的なエピソード

ここ数十年、セルフ・エスティーム (self-esteem) ほど、その高まりが望まれ、一般に広く普及している概念はない。とりわけ学校教育においては目指すべきランドマークとも言える位置づけにあり、児童・生徒でセルフ・エスティームが低下していることが多くの問題をもたらす根幹的な原因になると考えられてきた。このため、その育成への教育が数多く実施されてきたが、その多くは、見よう見まねで、ある意味恣意的にセルフ・エスティームを高める試みが繰り返し実施されてきた感が否めない。そして、現在もその傾向に陰りは見えない。

本論文の筆頭著者 (以下著者) はセルフ・エスティームとは無縁の基礎研究を心理学の学徒の頃から行っていたが、研究が子どもの教育に関係をもつようになると、このセルフ・エスティームを愛でる学校文化に否応にも触れることになった。その結果、著者の実際の研究に取り入れられることはなかったものの、この概念と育成について考えることが次第に増えて来た。実際のところ、興味が膨らみ、セルフ・エスティームの研究者や普及者にアプローチすることも何度かあったのは事実である。アプローチの度に興味はしほむことになったが、そのあたりの関連するエピソードを、現在の著者自身のセルフ・エスティーム研究への取組の背景の一端として、まず紹介してみたい。

かれこれ25年ほど前になるだろうか。セルフ・エスティームの研究者たちに、「本当にセルフ・エスティームが高い者が、『あなたは自信がありますか?』などと問われて、『はい、あります』と答えるでしょうか? そんな質問をされても、彼らは自分はどうなのかピンと来ないし、答えようがないのでは? それほどに、セルフ・エスティームが高い者は自分に自信があるかどうかなど意識していなのでは?」と尋ねたことがあった。そのとき、その研究者たちは何も答えず、その顔には失笑ともとれる笑みが浮かんでいたことを覚えている。それは、セルフ・エスティームの研究への熱が一気に冷める経験でもあった。「セルフ・エスティームの研究者は、こんな根本的な疑問にさえ向き合っていない」と、落胆したのだ。

またあるときは、自らはいまだ研究に手を染めていなかったものの、それまでのセルフ・エスティーム研究を根底から覆すアイデアが渾々とわき上がり、一気にそのアイデアを書籍用の目次と序にしたため、ある出版社に出版を依頼したときがあった。そのときの回答は、「セルフ・エスティームはもう世間では定着している概念です。そのような否定的な考えを書籍にはできません」というつれないものであった。読者に迎合するように、常識に弓する考えに閉鎖的な世界に触れ、またまたセルフ・エスティーム熱を冷ます出来事になった。

著者は常識というしがらみにとられる研究者や出版社を憐れむほどの失望感を抱いたが、かと言って自らセルフ・エスティームの研究に軸足を置くほどの契機にはならなかった。この概念の曖昧さと行われている研究水準の稚拙さを自分なりに感じとり、研究者としてのプライドがセルフ・エスティーム研究への踏み込みを許さなかったのかもしれない。今思えば、実に身勝手な思い上がりだったのかも知れない。その思い上がりが、この論文を書くのに10年以上の遅れをもたらすことになるとは当時は夢想だにできなかった。

予防教育の開発とセルフ・エスティームへの再度の疑問

著者の研究は簡単に言えば、ヒトの心身の健康や適応に影響を及ぼす心的特徴 (性格, 認知, 感情, 行動など)

*鳴門教育大学大学院人間形成コース

**兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科

に焦点をあて、その心的特徴と健康・適応との因果関係を調べる実証的な基礎研究であった。その基礎研究を10年ほど重ねた後、異動した職場が学校教育にとっぴり浸かる教育大学となれば、学校現場の子どもたちの窮状を目の当たりにすることになった。いじめ、不登校、暴力、授業への集中力の欠如など、子どもたちは山積する問題を前に苦しんでいた。学校教員も同様に苦しんでいた。その状況を前に、自分がこれまでに行ってきた研究の知見や内外の研究者による関連知見を利用して子どもたちを救いたいという思いが募ってきた。折しも日本で1995年から始まったスクール・カウンセラー制度は、子どもたちが問題をもったときの対応に国が本腰を入れ始めたことを物語っていたが、他方、問題をもつ前になんとかしよう、問題をもたない子どもを育成しようという視点はまったくの手薄状態であった。

「それでは」と開発を始めたのがトップ・セルフとも呼ばれる、新生の「いのちと友情の学校予防教育」(Trial Of Prevention School Education for Life and Friendship: TOP SELF)であった。この教育の詳細は他書にゆずるが(鳴門教育大学予防教育科学センター, 2013; 山崎, 2015), その教育の目指すところの中核は自律性(autonomy)であった(山崎, 2013)。そこでの自律性は、自己信頼心(self-confidence), 他者信頼心(confidence in others), そして内発的動機づけ(intrinsic motivation)からなる複合パーソナリティ(性格)と定義されている。簡単に言えば、ここでの他者信頼心とは、他者を好意的に見て、他者からも好意的に見られるという安定した感覚(認知と感情)のもとに他者を信頼する性格である。また自己信頼心は、自分に自信があり、有能であるにとらえる性格であるが、同時に不安と攻撃性が低く、そして上記の他者信頼心をとまなう概念である。山崎(2013)では直接的には自律性は、「何かをするとき、自分が自分の意思で動き、自分がその営みそのものを楽しみ、自分で独自のものを創造していく特徴」(p. 21)としている。そして自律性は、この3要素の特徴がすべて揃った定義になり、この自律性の発達のプロセスから推測すると、他者信頼心が低く自己信頼心だけが低いという自律性の発達は想定されない。そして、内発的動機づけは生得性が高く、他の2要素の発達基盤となる(山崎, 2013)。なお、自律性については他の研究者による多様な定義があり、この点については後述する。

直接的には、この自己信頼心がセルフ・エスティームと関連が深い概念となる。しかし、後述するが、これまでのセルフ・エスティームでは他者信頼心が低いことにもなる概念を含んでいることが分かり、トップ・セルフでの自己信頼心と従来のセルフ・エスティームは安易に同義には扱えないと考えられるようになった。ところが、トップ・セルフで自己信頼心という言葉だけを出すと、「セルフ・エスティームのことですね」と理解されることが多く、共通性もあるが両者を明確に区別する必要に迫られ、まずは、セルフ・エスティームの概念や過去の研究を精査することになった。

自己信頼心とセルフ・エスティームの乖離の可能性を示唆する例

セルフ・エスティームと自己信頼心が乖離する可能性を最初に理解していただくために、山崎(2013)を参照し、「あなたは、自信がありますか?」という、セルフ・エスティームの測定でよく使用される質問項目への回答を利用して具体的な例を挙げてみたい。このような質問に、「はい」と答える確率が極めて高い者をタイプ1とする。次に「はい」と答える確率が高い者、つまりほぼ肯定的に答える者をタイプ2、そして、「高いとも低いとも言えない、どちらとも言えない」と答えるような者をタイプ3と仮に呼んで置こう。

タイプ1は、一見して優等生タイプで、相対的に(他者との比較で)ものごとをとらえ、自分が重視する領域(学業等)で他者より勝ることが多い者である可能性が高い。タイプ2は、タイプ1と同様にものごとをとらえるが、それほど他者より勝ることは多くはなく、自分の弱点を直視したくない、その弱点を他者に知られたくない、つまり、防衛的に虚勢を張る者である可能性が高い。そしてタイプ3は、自分に自信があるかどうかなど考えたことはなく、面と向かって聞かれると答えに窮する者であり、このタイプに上記の自己信頼心が高い者が多い可能性がある。タイプ1と2は、他者との比較でものごとをとらえることから他者信頼心は当然低くなる。他者は競争相手であり、信頼して共同する対象ではない。こうして、このような質問紙で測定された従来のセルフ・エスティームがトップ・セルフのいう自己信頼心とは乖離することが想像できよう。

セルフ・エスティーム研究の主要問題の提起

上記にエピソードを交えて、セルフ・エスティームの悩ましい問題を示唆した。ここからは、できる限り客観的に、エビデンスを交えた記述に入りたい。本節では、セルフ・エスティーム概念の再構築をはかる必要性を明示して本論文の意義を示したい。そして、概念と測定法自体の問題の詳細は後述されることになる。

訳語の適切性ならびに概念と測定法の不備

まず“self-esteem”の日本語訳の問題にふれておきたい。この訳語の問題は、概念を再考する必要性の一端を示すことになる。日本語訳としては、自尊感情や自尊心とされることが多く、自己評価、自己価値、自己尊重、自己肯定感、自負心と訳される場合も散見される。なかでも近年は、自尊感情とされる場合が目立つ。英語でも、self-worth, self-respect, self-evaluation, self-appraisal, self-affirmation など関連した多様な語が確認される。概念の詳細は次節以降に譲るが、セルフ・エスティームは、感情はもとより、認知、思考、態度の特徴が含まれた定義になっていることが多く、実際の質問項目を見ると明確な行動について問う質問も確認できる。

この定義と質問項目の内容を見ると、セルフ・エスティームは感情面に限定される概念ではないことがわかる。山崎・倉掛・内田・勝間（2007）は、性格を認知、感情、行動、思考など具体的な心的特性を総合する構成概念であるとした。この見解によると、セルフ・エスティーム（自尊）・パーソナリティ（性格）と呼ばれる内容を持ち、現行の訳語であれば自尊心が最も適切な訳語となろう。本論文でも、セルフ・エスティームは性格であるとの立場をとるが、感情面が強調されている定義や項目も多いことから、自尊心とすると一般には感情面よりも思考や態度が強調される印象を与え、言葉から概念の制約を受ける可能性がある。そこで本論文では、日本語の用語に伴う印象からの制約を最低限にするため、「セルフ・エスティーム」というカタカナ表記で統一した。また、セルフ・エスティームのカタカナ表記を採用する研究者や教育者も少なくないことも事実である。なお、セルフ・エスティームを性格ととらえる以上、特性 (trait) としての観点を強調することになる。つまり、状態 (state) によって変化することがあっても、ベースとしての特性を重視する。ただ、状態によって変化しやすいというのも特性の一特徴になり、この点は後にセルフ・エスティームの「安定性」の観点から言及する。

次に、概念と測定法の問題が来る。本論文は、セルフ・エスティームの概念の混乱をとらえて概念の再構築を目指す目的をもつので、概念上の問題の認識が論文の出発点に来る。現在のセルフ・エスティームの概念の問題は、まず、概念化の抽象性が高く、概念を精緻化あるいは具体的水準で把握しようとするときに多様な解釈が出てしまうことである。概念提起の段階から、抽象性の高い内容から規定するとともに、そこに含有される具体的内容を必要最少限付与する概念の定義姿勢が望まれる。これはたとえば、セルフ・エスティームで言えば、「自分に自信がある」状態をもたらした原因が多様で、また「自分に自信がある」内容が多様であることから来る問題で、留意すべき点だと言える。この点では、研究上依拠する概念自体も研究者の意図したものになっていないか、研究者が概念について深く考察していないという状況も確認できる。実際に開発された尺度を他の研究者が使用する場合には、このことがよく起こる。つまり、その尺度が測定している概念を深く考えずに使用する場合が少なくない。

このように概念が曖昧であるから、その測定法も概念を正確に測定するという点では不備をもつことが多くなる。この結果、概念と測定しているものに乖離が起り、その乖離は測定法の開発者も気づかない乖離である場合が多く、ましてや使用者が気づくことは少ない。つまり、信頼性の問題の前に、根本的な構成概念的妥当性に疑義がある測定法が多くなる。

セルフ・エスティームと健康・適応ならびに学業成績の関係

このように概念と測定法に問題や多様性があれば、展開される研究から出る結果が混乱するのは必至であろう。これまでの結果を見ると、セルフ・エスティームは「良いもの、伸ばすべきもの」という通念の圧力からか、健康や適応面に良好な影響を与えたとの研究は数多い。いくつか例示すると、精神的健康面では、低いセルフ・エスティームと抑うつは正に関係し (e.g., Murrell, Meeks, & Walker, 1991; Sowislo & Orth, 2013)、暴力との関連では、Walker & Bright (2009) は19の研究をレビューし、そのうち12の研究が低いセルフ・エスティームと暴力との正の関係を見出していると報告している。また、セルフ・エスティームと学業成績の関連についても、両者は正の関係を示すことが繰り返し報告されてきた (e.g., Bowles, 1999; Davies & Brember, 1999)。

一方、セルフ・エスティームと健康・適応との関係を否定する研究も近年は数多く出ている。それらの研究は、セルフ・エスティームと健康・適応との関係に交絡する変数を考慮した場合や、単なる相関研究でなく、因果関係にまで研究精度を高めた研究であることが多い。たとえば、低いセルフ・エスティームと暴力の正の関連については Baumeister らが否定的で (e.g., Baumeister, Bushman, & Campbell, 2000; Baumeister, Smart, & Boden, 1996), Bushman, Baumeister, Thomaes, Ryu, Begeer, & West (2009) は攻撃へのセルフ・エスティームの独立した効果はなく、高いセルフ・エスティームと高いナルシズム (narcissism) をもった者が侮辱されたときもっとも攻撃的であったとしている。学業成績との関係では、縦断的な研究手法により因果推定力を高めた研究

では (e.g., Bachman & O'Malley, 1986; Pottbaum, Keith, & Ehly, 1986), セルフ・エスティームから学業成績への直接的な因果関係はなく, 社会経済的地位, IQ, 初期の学業成績などが学業やセルフ・エスティームを高めることを示唆している。この点では介入研究はさらに明確な結果をもたらし, セルフ・エスティームを高めるプログラムは後の学業成績を低めるか (Skaalvik & Hagtvet, 1990), 少なくとも学業成績を高める原因にはならないことが示唆されている (Scheirer & Kraut, 1979)。これに対して, 上記に示したセルフ・エスティームと抑うつとの負の関係やセルフ・エスティームと幸福感や生活満足感との正の関係 (e.g., Diener & Diener, 1995; Furnham & Cheng, 2000) は比較的安定した現象だと考えられてきた。しかしこの安定した関係も, そもそもセルフ・エスティームと抑うつは負の関係になることや幸福感と正の関係になることが自明の質問項目, つまり最初からそのような関係が想定される内容をもった項目が測定法に含まれており, またその関係は, 自己報告の測定法がもつ固有の問題 (たとえば, 社会的望ましさからの共通の影響など) から発生している可能性も指摘される。この領域にも縦断的な研究が充実すれば, 同種の回答誤差は統計的に相殺できることになり, セルフ・エスティームと抑うつや幸福感の関係が消失することが十分に考えられる。

この点に関連して特記されることは, アメリカ心理学協会 (American Psychological Society; 現 Association for Psychological Science) が, セルフ・エスティーム反対の先鋒者である Baumeister らにタスク・フォースを設けさせ (American Psychological Society Task Force on Self-Esteem), セルフ・エスティームの効果の総合的な評価を依頼したときのことである (Bronson, 2007)。彼らは, 2001年にそれまでに出されたセルフ・エスティームと他変数との関係についての15,000以上の論文を抽出して調べ上げた。その結果, ほとんどの論文は個人的ならびに社会的問題への因果の推定には十分な方法をとっておらず, 設定した厳格な基準で残った研究を精査した Baumeister らは, セルフ・エスティームは成績もキャリア達成も高めず, 対人関係も良好ということはないと報告した。また, 幸福感との正の関係を除いて, 暴力も低下させず, 喫煙, 飲酒, 薬物, それに早期の性行動を低めてはいなかったと, セルフ・エスティームが良好な結果をもたらすとの見解に否定的な結論を下し, 臨床場面や学校場面でセルフ・エスティームを伸ばす試みの効果を否定した (Baumeister, Campbell, Krueger, & Vohs, 2003)。

このように, 因果推定力を高めた研究をはじめ過去の多くの研究は, 学校でセルフ・エスティームを育成することの危険性を示唆している。健康や適応面とは無関係か悪化させる可能性があり, 学校で最も重視している学業に至っては悪化させるという知見がかなり優勢である。しかし, 現在もなおセルフ・エスティーム神話は, 学校さらには教育行政に根づいている。このように根づいているのは, 直感的にも経験的にもセルフ・エスティームの育成が子どもを伸ばすことを多くの教師が感じとってのことだろう。しかし, それらは主観的な経験でしかなく, 地動説が提起されてから認められるまで何百年にも渡って天動説が信じられて来たのと同じような, 経験と真理の乖離の問題がここにあるのかもしれない。

このような状況の中, セルフ・エスティームと健康・適応, 学業との正の関係は捨て, セルフ・エスティームの育成という教育を危険視して排斥すべきなのか? それとも, セルフ・エスティームのとらえ方や測定法に根本的な問題があり, それを改善すべきなのか? 本論文はこの問題に決着をつけるための提案を行う目的をもち, そのため, セルフ・エスティームの概念と測定法の現状を把握し, その問題と改善の可能性へ考察を進める必要がある。

セルフ・エスティームの古典的概念

セルフ・エスティームは心理学の勃興前から David Hume ら哲学者によって取りざたされていた概念であった。心理学では William James が心理学的概念として初めてこの用語を用い, その後1960年代の終わりには, Nathaniel Branden の著作にも影響され「セルフ・エスティーム運動」と呼べるほどの勢いをもって社会に浸透していった。そして近年, 上述したような研究知見の混乱がもたらされることになるが, それにもかかわらず, 現在もなお児童・生徒がそなえるべき中核的な特性としてその育成が続いている。

この間心理学においては, セルフ・エスティームについていくつか注目される概念の提起があった。その概念提起は大きく2つの時期に分けられると考えられるが, まずは初期の, セルフ・エスティーム全体を直接的に定義した概念の提起であり, 概念定義において本論文では第1期と称する時期である。この第1期は長期に渡り, それだけにセルフ・エスティームの概念を定義しようとした研究者は数多い。ここでは, William James, George H. Mead, Harry S. Sullivan, Kren Honey, Alfred Adler, Carl Rogers, Erich S. Fromm, Gordon Allport,

Albert Ellis など多くの研究者がセルフ・エスティームに関連して概念を提起し定義している。そのなかでも、自らがセルフ・エスティームの実証的な研究や教育に携わり、自ら定義したセルフ・エスティームを実際に研究や教育に適用した研究者の定義を見てみたい。さらに言うと、自ら定義したセルフ・エスティームをもとに研究や教育を展開し、その研究・教育活動が自分の研究・教育活動の中心になった研究者の定義である。ただ William James の定義だけは、この条件に合わないものの、心理学における定義の出発点として取りあげておきたい。なお、上記の研究者のセルフ・エスティームについての考え方の多くは Coopersmith (1967) に紹介されているので参照されたい。

とは言え、このような限定をしたがその限定範囲に入る定義をすべて網羅できていないし、また網羅することが本論文の目的でもない。この限定範囲に入る主要な定義を取り上げ、セルフ・エスティームの概念のこれまでの扱いとその問題をとらえることがここでの目的となる。なお、ここで取りあげなかったものとして留意しておく定義は、たとえば, Bednar, Wells, & Peterson (1989), California State Department of Education (1990) などになる。

James の定義と見解

まず、心理学で最初のセルフ・エスティームの概念定義となる James (1890) では、Coopersmith (1967) を参照して紹介すると、セルフ・エスティームを成功 (success) と要求 (pretension) の比として表した。このセルフ・エスティームの決定では、評価がどの領域でなされるかが重要で、James はその例として、誰かが自分より心理学に精通していると屈辱を感じるが、自分がギリシャ語ができなくても何ら恥ずかしいことではないことを挙げている。さらにセルフ・エスティームを決定する要因として、成功と地位の社会的な基準を挙げている。過度に高揚しようが落ち込もうが、人は、他人にも適用する外的基準によって自分自身の価値を確実にとらえ、自分自身についての完全には逃れることができない不当な感情に対抗するだろう。そして第3の決定因は、自己の延長上に置かれた価値であるとする。彼は、呼び起こすことのすべて、身体ならびに心理的なプロセスのみならず、服、家、妻、子ども、先祖、友だち…のすべての総合計により自己を見る。これらはすべて同じ感情をもたらし、それらがよいものになれば、誇らしく感じ、駄目になれば落胆する。どれも同じ程度というわけではないが、およそ同じ程度に。そしてここには、自分の仲間から得る理解である社会的自己もある。人は、自分を見て自分についてのイメージをもつ人の分だけ社会的自己をもつ。そのイメージを損うことは自分を損うことにつながる。

James が実際にこの定義に沿った測定法を開発したわけでもなく、この概念を正確に測定する方法が可能なのか疑問視される。しかしその疑問視は、裏を返せば、James のセルフ・エスティームの定義がそれほど周到かつ複雑であることを示し、自分にとっての重要領域での〔要求〕分の〔成功〕の式のみならず、自分にかかわる生活上、現実上の諸要素、そして他者の存在との関係を考慮した定義は、その後のセルフ・エスティームの概念構築に多大な影響を与えたものと推察される。

Rosenberg の定義と見解

Rosenberg (1965) によれば、セルフ・エスティームは自己への正か負の態度である。そして、高いセルフ・エスティームに2つの異なる意味を含ませ、両者を対比しながら望ましいセルフ・エスティームの意味を明らかにしている。その意味の一つは、自分を「非常によい (very good)」ととらえていること、今一つの意味は、自分を「まあ、よい (good enough)」ととらえていることである。前者は、自分が他者よりもまさっていると考えるが、自分が自分に設定する基準では不十分だと感じることもなる。後者では、自分を平均的な人間だととらえるが、自分が見たところ自分にはかなり満足している。なお、“good enough” は「これでよい」と訳されることが多いが、下記に示す「改善して成長する」という視点を含めれば、「まあ、よい」の方が適切な訳語だと考えられる。

そして後述する彼が作成した尺度では、高いセルフ・エスティームは後者の「まあ、よい」という感じをとらえるものだとしている。そこでの高いセルフ・エスティーム保持者は、今の自分を尊ぶが、必ずしも自分を他者よりも優れているとは考えていない。そして、自分の不完全さと不十分さに気づき、これらの欠点を克服できると確信をもって期待している。この欠点を改善して成長するという点で自己受容 (self-acceptance) の概念とは異なり、うぬぼれているということではないという点では自己満足 (self-satisfaction) の概念とも異なるとしている。

Rosenberg の、この「まあ、よい」という観点からのセルフ・エスティームの定義は広く受け入れられ、彼の測定尺度がセルフ・エスティーム研究では最も頻繁に使用されてきた。しかし、彼のセルフ・エスティームの測定法には問題があり、また概念と測定法の間にも問題あることが指摘され、この点については後述したい。

Coopersmith の定義と見解

Coopersmith (1967) の定義を原文より引用すると、「セルフ・エスティームは、個人が自分自身に関して行い、通常維持している評価である。それは、承認の態度を表し、個人が自分自身を有能で、大切に、成功していて、価値があると信じる程度である。つまり、セルフ・エスティームは個人が自分自身についてもつ態度において表現される、価値があるとの個人的な判断である」(pp. 4-5)となる。そしてセルフ・エスティームは、言語報告により他者に伝えられる主観的な経験であり、その他表に出た行動であるとしている。そして、前者は意識された報告であり、後者は無意識的な表現であるととらえている。

さらに彼は、セルフ・エスティームでも安定した、全般的セルフ・エスティームを研究の対象にしている。学童期前に自己価値への全般的な評価を達成し、それが比較的安定するとし、また、領域ごとにセルフ・エスティームの高低はあるが、その差異は比較的小さく、この点で全体的なセルフ・エスティームを強調している。

Coopersmith の定義は、他の研究者の定義と比較すると、子どもの研究を中心として展開され、セルフ・エスティームの形成過程を重視し、セルフ・エスティームの安定性や全体性を強調していることが特記される。また、セルフ・エスティームの無意識的な表現という側面をとらえていることも注目されるが、セルフ・エスティームにおける意識的表現と無意識的表現の関係や強弱についてほとんど触れられていない。

Branden の定義と見解

Branden (1969) はアメリカのセルフ・エスティーム運動を興し、推進する役割を担った書籍であった。その書籍では、彼のセルフ・エスティームへの見解が明記されている。後に出版された一般向けの書籍 (Branden, 1992) とあわせて、その見解を紹介してみたい。Branden によれば、セルフ・エスティームは、人生において出会う様々な課題 (challenges) について考え、対処できる力への自信、そして、幸せになることへの自信、つまり、自分には価値があり、自分の要求や欲求を主張し、自分の努力の成果を享受できるという気持ち (feeling) である。この内容は、2つの関連する側面、つまり、自己効力感 (a sense of personal efficacy) と自己価値感 (a sense of personal worth) からなり、前者は自己信頼 (self-confidence)、後者は自己尊重 (self-respect) になり、それらが統合されたものがセルフ・エスティームとなる。言い換えれば、生きる能力があり (competent)、生きるに値する (worthy) という確信である。

Branden (1992) は、このセルフ・エスティームの2側面を自己効力感と自己尊重とし、簡潔に説明している。自己効力感とは、自分の心 (mind) の機能についての自信、考える力への自信、自分が判断し、選択し、決定するプロセスへの自信であり、自分が興味をもち、必要となる事柄に関連した現実を把握する力への自信、自己信頼 (trust) の認識、自己依存 (reliance) の認識である。一方、自己尊重は、自分の価値の確信、生きる権利、幸せになる権利への肯定的態度、自分の考え、要求や欲求を適切に主張することを快く思うこと、喜びは生まれながらの権利だという気持ちのこととされている。

Branden の定義は最も詳細であるが、詳細にとらえようとした分拡散性が高くなっている。この定義を忠実に反映する測定法は著者たちの知る限りでは確認されない。この点に関連して、彼の実証的な研究を行う姿勢は不十分であったことも指摘される。ただ、Branden ほど広く一般の人たちにセルフ・エスティームの重要性を流布し、その育成への活動を高めた者はなく、この点で良くも悪くも、これまでのセルフ・エスティームの展開では中心的な人物になっていた。

Pope らの定義と見解

Pope ら (Pope, McHale, & Craighead, 1988) によると、セルフ・エスティームとは、「自己概念に含まれている情報を評価することであって、今の自分に関するすべての事柄について自分が抱いている感情から出てくるものである」(高山監訳、原典と翻訳本とも p. 2)。そしてその評価は、James と同様、自己についての客観的な見方と個人が価値を置いている、またはそうありたいと思っている自己のずれによって行われる。とりわけ、Pope らは、個人が価値を置いている領域での客観的な見方を強調し、その点から自己概念の形成領域である社会、学業、家庭、身体イメージごとにセルフ・エスティームを測定することを強調し、さらに全般的なセルフ・エス

ームの存在も重視した。Pope らの書籍はセルフ・エスティームの学術書としては日本で唯一翻訳本が出版され（普及書の翻訳本は数冊ある）、このことから彼女らの尺度は日本でもよく使用されている（林, 2004; 中山・西山・柳澤, 2011）。

Pope らの定義は、セルフ・エスティームの多面性を指摘して強調した点で特徴がある。しかし、全般的なセルフ・エスティームと個別領域でのセルフ・エスティームの関係のとらえ方が曖昧であり、この点では、セルフ・エスティームの領域別への細分化がセルフ・エスティームの概念そのものを拡散させ、曖昧さを高めた感は否めない。この問題は、セルフ・エスティームが単一の概念か、多次元の概念かの問題に関連し、研究者によってそのとらえ方が異なり論争の一部を形成している（e.g., cf. Heatherton & Wyland, 2003）。

以上のように、セルフ・エスティームの概念には根本的に異なる見解はないが、概念の細部や強調点が提起者によって異なる。しかし、以降に示すように、このような概念定義ではとらえられていないセルフ・エスティームの側面や特徴が指摘されるようになり、概念の提起では第2期とも呼べる新概念がセルフ・エスティームに関連して公表され始めた。

近年のセルフ・エスティームにまつわる諸用語とその概念

セルフ・エスティームと健康・適応や遂行力の関係についての研究知見の混乱は、自ずとセルフ・エスティームの概念に再考を迫ることになった。セルフ・エスティームが生活上の良好な結果をもたらさないのはセルフ・エスティームそのものの問題ではなく、セルフ・エスティームの側面や部分的特徴の違いによっては良悪の結果の違いをもたらす可能性があることによるという見解が数多く出てきた。この見解のもと提起された新概念をセルフ・エスティームの概念提起の第2期として、各概念について本節で紹介したい。

セルフ・エスティームが高いとひとことで言っても、その内容は異質である場合があるのは、先述したように、すでに Rosenberg (1965) により “very good” と “good enough” の弁別的な記述により指摘されている。そして近年、随伴性や安定性の概念からセルフ・エスティームを弁別する試みが確認される。その代表格は、Deci ら（e.g., Deci & Ryan, 1995）の真のセルフ・エスティーム（true self-esteem）と随伴的セルフ・エスティーム（contingent self-esteem）の新概念である。彼らによると（Moller, Friedman, & Deci, 2006）、真のセルフ・エスティームは、自分に関して内発的な満足の形態をとり、比較的安定し、性質上、本人には特にその自覚はない。つまり、真のセルフ・エスティームが高い者は、そのセルフ・エスティームに頓着せず、また自己を対象として評価せずに、自律的な動機づけが高まる。このセルフ・エスティームと対立するのが随伴的セルフ・エスティームであり、自分が設定する外的な達成基準に依拠してその高低が決まる。そして、この達成基準はしばしば他者との比較により設定されることになる（Deci & Ryan, 1995）。このように弁別すると、真のセルフ・エスティームこそが良好な結果をもたらし、随伴的セルフ・エスティームは負の結果をもたらすことが示唆される（Deci & Ryan, 1995）、セルフ・エスティームに関する結果の不一致に新しい視点をもたらすことが考えられる。なお、随伴的セルフ・エスティームは、セルフ・エスティーム研究の初期から提起されてきた社会的セルフ・エスティーム（social self-esteem; e.g., Ziller, Hagey, Smith, & Long, 1969）とほぼ同義であるが、社会的セルフ・エスティームは他者との比較において規定される特徴が強い。

また Kernis (2003) は、高いセルフ・エスティームの性質を、脆く高いセルフ・エスティーム（fragile high self-esteem）と安定した（頑健な）高いセルフ・エスティーム（secure high self-esteem）に大別している。前者は、外的要因への随伴によって引き起こされ、随伴事象における成功・失敗の影響を強く受ける不安定な性質をもち、また非意識的な自己価値とは合致しない。そして脆く高いセルフ・エスティームは、自己を脅かす事象に対して不適応的反応を起こす。一方で、安定した高いセルフ・エスティームは、外的要因へ随伴せず安定し、適応的で、非意識的な自己価値とも合致し、Kernis (2003) はこれを最適なセルフ・エスティーム（optimal self-esteem）と呼んだ。その適応的機能の中核を担う要素は、本来性（authenticity）であると論じている。本来性とは、「自己の日々の活動において、ありのままの自分自身あるいは自分自身の中核を成すものの働きが妨げられていないことに特徴づけられる」（p. 13）と述べている（Kernis, 2003）。そして、この本来性には4つの要素があり、アウェアネス（awareness; 自己理解）、歪みのない処理（unbiased processing; 自己評価の客観性）、行動（action or behavior; 自己の価値、要求、行為間の一致）、対人関係への志向（relational orientation; 親密な人間関係において開放的、誠実、そして気取らないこと）である（Goldman, 2006）。そして、この本来性が

多くの良好な結果をもたらすことが示され (cf. Goldman, 2006), これは同時に最適なセルフ・エスティームの結果となる。この概念に関連して伊藤・小玉 (2005) は, こうした特徴に基づき生起する感覚を本来感 (sense of authenticity) とし, それを「自分自身に感じる自分の中核的な本当らしさの感覚の程度」(p. 75) と定義づけて研究を進めていることを付記しておく。

このような近年のセルフ・エスティームにまつわる新概念を見ると, それらは極めて類似した概念であることがわかる。すなわち, 真のセルフ・エスティームと最適なセルフ・エスティームは概念の共通性は高く, 同様に随伴的セルフ・エスティームと脆く高いセルフ・エスティームの概念も類似している。ただ, 真のセルフ・エスティームは Deci らの自己決定理論 (self-determination theory) の中で展開される概念であり, 最適なセルフ・エスティームは本来性をその解釈基盤としている。自己決定理論の中での真のセルフ・エスティームの扱いについては後述したい。

自己報告式質問紙と Rosenberg 尺度の問題

Rosenberg 尺度に特有の問題

セルフ・エスティームの概念が再考される動きが多い中, 概念を測定する方法にも同時に検討すべき問題点が浮かび上がる。これまで, セルフ・エスティームは自己報告による自記式の質問紙で測定されることが多く, その使用頻度においては群を抜いて高く, セルフ・エスティームの知見の構築のための主要な測定道具となっているのが Rosenberg (1965) の尺度である。そこで, この尺度を中心に自己報告式質問紙による測定法の問題に触れてみたい。

Rosenberg の尺度は本来ガットマン尺度 (Guttman scale) であるが, これまではリカート尺度 (Likert scale) として使用されることがほとんどであった。もともとガットマン尺度であったものが, いつからどのようにしてリカート尺度として使用されるようになったのか, 著者らが調べた範囲では不明であった。さらに言うと, いつからどのようにして現行の項目順になったのかも不明であった。ただ Rosenberg 自身は, 遅くとも 1979 年の時点で, このリカート版がよく使用されていることを確認し, また使用できるようなコメントをしているようである (Garvie, 1979)。

この尺度は多用されているものの, 同時に多くの問題も指摘されていた。その問題は, 本来の 1 因子に対して多因子とする因子構造の問題 (e.g., Kaplan & Pokorny, 1969; Richardson, Ratner, & Zumbo, 2009) や, リカート法でも 4~6 段階までという回答方法の多様さ (田中, 2008 参照) で, 尺度と他の変数との関係では先述した研究結果の不一致においてこの尺度を用いた研究も多く, 問題は山積されている。この邦訳版に限定してみると, 多様な日本語訳, さらに多様な回答方法が併存し, 測定されている内容が邦訳版によって異なっている可能性が十分に推測される。原典の英語項目ではなくその翻訳項目を使用し, その翻訳後の項目と原典との類似性を客観的かつ正確にとらえることができないだけに, 日本での研究の混迷度は深いと言わざるを得ない。

しかし, 本節で論じたいのはこのような問題ではない。日本ではどうかという問題でもない。Rosenberg の原典の項目が測定しているものは何か, つまり, 彼がセルフ・エスティームの概念として提起した内容が測定されているのかどうかという問題である。表 1 には, この尺度の 10 項目すべてが示されている。また, 邦訳版では信頼性や妥当性の点でもっとも出来映えが良いと考えられる (内田・上埜, 2010) Mimura & Griffiths (2007) の邦訳項目をあわせて掲載されている。

まず, 意味的内容から項目を分類してみる。全 10 項目のうち逆転 (逆行) 項目が半分の 5 項目含まれている (2, 5, 6, 8, 9 番)。順行項目のうち 2 項目 (4 と 7 番) には「他の人と同じくらい」という表現だが他者との比較の項目が入っている (順行他者比較項目)。さらに, 逆行項目では明確な他者比較はないが, 役に立たない (6 番) と落ちこぼれ (9 番) という他者比較を想定するような項目がある (逆行他者比較項目)。つまり, 順行無比較項目 3 項目, 順行他者比較項目 2 項目, 逆行無比較項目 3 項目, 逆行他者比較項目 2 項目からなると考えることができる。

Rosenberg のセルフ・エスティームの概念では, (a) 自分を平均的な人間ととらえるが, 自分にはまずまず満足している, (b) とは言い, 自分には不十分さがあることを知っていて, それを改善して行くことを期待している, という 2 要素が弁別して指摘されている。この観点からみると, 順行項目は (a) の内容を測定しようという意図が見える。ただ気になるのは順行他者比較項目で, 「他の人と同じくらい」と平均的な人間であることを問うているが, 他者との比較に注意を向けている点が指摘され, この英語内容を見ると他者より優れていると

表1 Rosenberg セルフ・エスティーム尺度の項目 (英語は Rosenberg, 1965; 日本語は Mimura & Griffiths, 2007; 内田・上埜, 2010 より)

1	On the whole, I am satisfied with myself. 私は、自分自身にだいたい満足している。
2	At times I think I am no good at all. 時々、自分はまったくダメな人間だと思うことがある。
3	I feel that I have a number of good qualities. 私にはけっこう長所があると感じている。
4	I am able to do things as well as most other people. 私は、他の大半の人と同じくらいに物事がこなせる。
5	I feel I do not have much to be proud of. 私には誇れるものが大してないと感じる。
6	I certainly feel useless at times. 時々、自分は役に立たないと強く感じることもある。
7	I feel that I'm a person of worth, at least on an equal plane with others. 自分は少なくとも他の人と同じくらい価値のある人間だと感じている。
8	I wish I could have more respect for myself. 自分のことをもう少し尊敬できたらいいと思う。
9	All in all, I am inclined to feel that I am a failure. よく、私は落ちこぼれだと思ってしまう。
10	I take a positive attitude toward myself. 私は、自分のことを前向きに考えている。

* 回答は4件法で, Strongly agree (強くそう思う), Agree (そう思う), Disagree (そう思わない), Strongly disagree (強くそう思わない)。

感じる者も得点が高くならざるを得ない。この点では、順行項目全体が彼の言う“very good”と“good enough”を弁別できる項目になっていない。順行無比較項目で具体例を出すと、例えば3番の項目では、“very good”と“good enough”の両者とも得点が高くなる可能性があり、むしろ“very good”の者の方がより高くなる可能性が高い。次に逆転項目であるが、これらの項目は (a) の内容を直接的にとらえる項目ではなく、順行項目と同様に、“very good”と“good enough”の両者とも逆に算出した場合得点が高くなり、同じように前者の方が高くなる可能性が十分にある。さらには、(b) の内容を直接的に測定する項目はこの10項目には含まれていない (10番が若干この内容に関連する)。つまり、(b) の内容はほぼ測定できない。

上記は項目内容からの推論であり、実際に (a) と (b) を測定できるのかどうかは構成概念妥当性により直接的に検証する必要があるが、著書たちの知るかぎりでは直接的な妥当性の検討は行われていない。確かに、何らかの基準関連妥当性や併存的妥当性の検証はこれまでに行われているが (たとえば、古くは Rosenberg, 1965, 最近では Donnellan, Ackerman, & Brecheen, 2016), そこで妥当性の基準として使用されることの多い健康や適応とセルフ・エスティーム自体の関連が正負混沌としている以上、多くの妥当性検証の研究は妥当性の研究としては成り立っていない。この意味では、(a) と (b) の内容をもつかどうかを直接的に調べる妥当性の検討が必要になる。その一つの方法は、この概念に十分に習熟した評定者が、その特性について把握している集団成員を対象にセルフ・エスティームの高低を評定する方法になろう。また何らかの行動を基準にして実験を行うことも考えられるが、概念自体が明確で具体的な行動に出にくいことからその実施は難しいことが予想される。

こうして、もっとも頻繁に使用されている Rosenberg の尺度は、少なくとも彼の言うセルフ・エスティームをとらえていない可能性が高い。

自己報告式の質問紙全般に共通する問題と限界

自分で自分をとらえて回答する自己報告式の質問紙は、セルフ・エスティームが他者ではなく、自分でしか把

握できない部分があるということでの利点はある。しかし、後述するように、それは基本的には意識上でなされる反応であり、この意識上での反応ではセルフ・エスティームの測定には不十分になることが考えられる。自己報告式の最大の欠点は、回答者が社会的に望ましい回答をしてしまうということである。とりわけセルフ・エスティームが高いということは社会的には称賛される特徴であり、逆に低いと肩身が狭くなる特徴になる。このことから、セルフ・エスティームを自己報告式の質問紙でとらえた場合、社会的に望ましく見せようとする反応が出る。この社会的に望ましく見せる反応は自己欺瞞 (self-deception) と印象操作 (impression management) に分けることができる (cf. Paulhus, 1984)。自己欺瞞は、実際とはかかわりなく自分もっていると感じている自分自身についての良いイメージで回答する傾向、そして印象操作は、意識的に社会上望ましい反応をしようとする傾向である。いずれの傾向も、セルフ・エスティームを高く評価することになり、とりわけ他者比較に鋭敏な者はこの傾向が高まることが推測される。つまり、特にセルフ・エスティームの測定の場合は、自己報告式の質問紙は得点が高くなる方向での歪みが大きくなり、この点でこの方法はセルフ・エスティームの測定には適さないことが考えられる。

次に、自己報告式質問紙が意識上での回答であることに大きな問題がある。近年の脳科学や心理学は、無意識や意識の問題に踏み込んでいる (山崎・内田・横嶋・内山, 2016)。この無意識への踏み込みは、Sigmund Freud から発展した精神分析学上の扱いとは異なり、実証的な方法論をもってその機能が解明されつつある。意識に至っては、これまで脳科学の研究では踏み込むことができなかった領域であるが、近年の脳活動の測定法の発展に支えられ、画期的な研究知見が数多く出始めている。本論文はその詳細を紹介する目的をもたないが、山崎ら (2016) に詳しいので参照されたい。

このような無意識と意識の研究知見の発展の中で、人間の日々の活動の9割ほどは無意識によって司られていることの示唆から (Bargh & Chartrand, 1999)、意識上の行動は極めて限定的で (e.g., de Gelder et al., 2008)、多くの場合本来の行動 (認知や思考などを含む) を意識が歪曲することが示されている (e.g., Libet, Wright, Feinstein, & Pearl, 1979)。もちろん意識にも重要な役割があり、その役割が確定されたわけではなく多様な見解が飛び交っているが、Dehaene ら (e.g., Dehaene, 2014) のグローバル・ニューラル・ワークスペースモデル (global neuroal workspace model) の見解は迫力があり、少なくとも、ある外的刺激が無意識に認知される場合と比較し、意識を伴って認知された場合は多くの脳部位が活性化し、つまり多様な脳部位のかかわりを産み出し、多様な情報の利用とその情報統合がなされることになる。Massimini ら (e.g., Massimini & Tononi, 2013) の意識の情報統合理論 (integrated information theory of consciousness) による、情報の輻輳した交換が意識上で行われるという見解も、内容は異なるが意識の機能について同様の方向から構築された理論と考えられよう。

普段無意識に行われていることが意識に上るときは、主に、詳細で統合的な分析がなされる必要があるためだと考えられる。多くの場合その事態は、普段とは異なる刺激 (事象) に遭遇したときや、問題に出会い自動的あるいは容易に解決を見いだせないときなどになり、意識上での広範で統合的な情報を利用する必要があるときになる。もちろん、意識上にもって来ることの容易さは情報や問題によって異なるだろう。同様の推論は、Dijksterhuis, Chartrand, & Aarts (2007) などにもあり、意識の役割の一端となる可能性は高い。この観点からセルフ・エスティームを見てみたい。Rosenberg の定義にあるように、セルフ・エスティームを他者比較によるものではなく、自身の能力や行動等へのある程度の満足を反映するものだと考えると、この特性は普段意識されることなく人の行動を左右していると考えられる。言い換えれば、意識上にもって来る必要性は通常の日常生活においてはまず確認されないだろう。なぜなら、通常は、特定の注意を当てたり、問題対象として意識上に送る必要はないからである。この非意識下で機能するセルフ・エスティームが質問紙の要請により意識上にもって来られるときは、上述の社会的な望ましきからの歪みの他に、様々な歪曲要因がかかる可能性がある。恐らくその歪曲要因の多くは、質問紙の評価のために意識上で具体的な基準を参照することによって生じることが考えられる。その基準の多くは、現代の競争あるいは相対的な成否の位置付けに鋭敏にならざるを得ない社会では、他者との比較による優劣の結果であることが多いだろう。ここから、自己報告式のセルフ・エスティーム測定法は大なり小なり他者比較への鋭敏性を反映することになる。

上記の推論は他の性格、たとえば、外向性の場合にも当てはまる。ただ、外向性の質問紙による測定の場合は、その内容上セルフ・エスティームほど社会的望ましきの歪曲を受けないことが予想される。また、外向性という性格がもたらす行動が極めて明確で露わな行動 (「人と話をするのが好きだ」など) に現れるため、質問紙でそのことを尋ねると比較的正確にその行動をとらえることができる。つまり、外向性の場合、自己報告式質問紙に

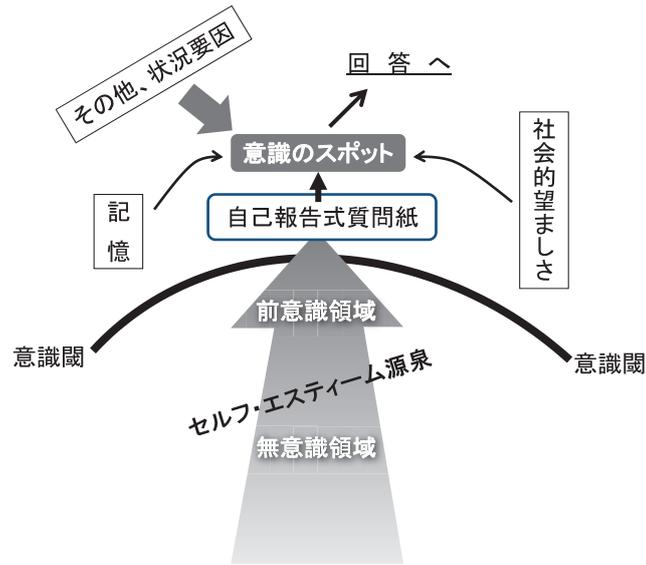


図1 自己報告式質問紙の回答に影響を及ぼす無意識から意識領域における諸要因

よる測定の可能性はそれほど低くないことになる。この点では、セルフ・エスティームの定義を Rosenberg のように「まあ、よい」とした場合、それがどのような行動に表れるのか、本人も質問紙作成者にも明確な行動として表現しづらいという問題がつかまとう。

自己報告式質問紙の問題と意識と無意識領域の関与についての上記の見解を図示したのが図1である。上記に説明した他にも、自己報告式質問紙での回答は回答時の体調や感情状態など多様な要因から影響を受けるが、これらは固定された影響因ではないので、図では「その他、状況要因」として一括提示した。

こうして、意識上で回答する自己報告式の質問紙では、一般人の行動を無意識的に左右しているセルフ・エスティームを測定することは難しいことが推測される。つまり、セルフ・エスティームの測定は意識上では難しいということになると、意識上で回答することを前提としていたこれまでのセルフ・エスティームのとらえ方を再考する必要がある。しかしながら、そもそもセルフ・エスティームとは意識上の概念に限定されるものだと考えるならばそれはそれで良いのだろうが、その場合は、本論文でこれまでに展開してきたエビデンスや論理より、セルフ・エスティームのほぼすべては望ましい特性ではなく、学校教育において育むべき特性ではないということを受け入れて研究を進める必要があるだろう。それではセルフ・エスティームを低める必要があるという教育の方向が見えてしまうことになり、その方向ではセルフ・エスティームの概念と研究は早晩消失することになるだろう。そこで筆者らは、セルフ・エスティームの概念と測定法を再考するために本論文を執筆した。意識上の概念に限定する立場をとらず、むしろ主として非意識下で展開される特性としてとらえ、あくまでも育成することが望ましい特性としてその概念を再構築したい。恐らく、セルフ・エスティームという用語の普及度から言って、この用語をそのまま用いて概念を変更することは混乱をもたらす可能性があるので、第2期の新概念のように何らかの形容語を付加しての概念の再構築となろう。

セルフ・エスティームに関連する概念の再構築

本論文の最初に、トップ・セルフという予防教育の目標として自律性という心的特性を紹介した。この自律性は様々な研究領域の多くの研究者によって使用されてきた用語であり、その概念の大きさと抽象性の高さもあってか確立された共通の定義はなく、およその共通性はあってもそれぞれの研究者が独自にその定義を行って来た。そもそも自律性の用語自体が心理学の専門用語として出現したのではなく、一般用語として、また哲学等他学問において広く使用されて来たことから、これはやむを得ない状況であろう（多分野における定義の多様性と変遷は、Ryan & Deci, 2006 を参照）。たとえば、心理学の実証的研究領域での変わり種を挙げると、Eysenck ら (e.g., Eysenck, 1987; Grossarth-Maticek, Eysenck, & Vetter, 1988) は、性格をタイプ分けし、中でも健康的な性格をタイプ4（個人的自律, personal autonomy）と呼んだ。このタイプは、「自分たち自身の自律性と自分たちが一緒にいたいと願う人たちの自律性との両方を、自分たちのウェルビーイングや幸福の最重要条件

と考える。また、望むものに対して現実的なやり方で接近あるいは回避行動をとり、望む対象の自律性もまた同時に受け入れる」(Eysenck, 1991, p. 56)とした。自律性自体の定義は避けてタイプ4の特徴を記述したものであるが、その測定法も開発し、ガンや冠状動脈性心疾患などによる死亡率を指標にしてこのタイプが健康を導くことを明らかにしている (Eysenck, 1987)。さらに、心理学で最も有名な自律性の扱いは、その概念を内包する Deci と Ryan らの自己決定理論 (self-determination theory) において見られる (e.g., Ryan & Deci, 2000)。彼らは、自己決定理論を構成するミニ理論の1つである認知的評価理論 (cognitive evaluation theory) において (Ryan & Deci, 2002)、内発的動機づけを左右する要因として、有能さ (competence)、自律性 (autonomy)、関係性 (relatedness) の概念を導入し、これらを基本的欲求 (basic needs) とした。彼らの内発的動機づけの概念は拡散気味であるが、「新規でチャレンジ性のあるものを捜し出し、自分の能力を伸ばしたり訓練し、探索し、そして学習する生得的な傾向」(Ryan & Deci, 2000, p. 70) とされている。自律性の概念になるとその抽象性は高まり、Ryan & Deci (2002) によれば、自律性は自分自身の行動の知覚された出所であり、自律性の高い者は、自己の興味ならびに統合された価値 (integrated values) から行動している。自律的な場合、自己を表現しているものとして自分の行動を経験し、自分の行動が外部のものに影響されていても、その影響を受け入れ、そこにイニシアチブと価値を感じる。また、自律性は独立心 (dependence) とは異なる概念になり、自分が納得すれば、他者の要求にそった行動をすることにもなる。

本論文の最初に示したように、山崎 (2013) は Deci らの見解とは独立して、自己信頼心、他者信頼心、内発的動機づけの複合パーソナリティとして自律性の概念を提起している。この3特徴の複合性からすれば、山崎と Deci らの自律性の意味は共通性のみならず相違性をもつ。山崎の自律性は、Deci らの自己決定理論中の諸概念に照らし合わせると、自己信頼心は有能感を、他者信頼心は関係性を含み、内発的動機づけは同義になる。また Deci らでは、内発的動機づけを高める要因の1つとして自律性を挙げているが、内発的動機づけと自律性は、自己の興味から行動するという点では概念上の共通点は少なくない。さらに、生得性の高さから考えると、内発的動機づけが土台になり後発的に確立されるのが彼らの言う自律性という側面も指摘される。しかしいずれにしても、自律性、内発的動機づけ、自己信頼心 (有能感)、他者信頼心 (関係性) は相互に関連し一体として形成される可能性は高く、こう見ると、山崎と Deci らの自律性の概念はかなりの部分が重なり合うことも示唆される。ただ山崎では、自律性が高いことは自己信頼心、他者信頼心、内発的動機づけのすべてが高いことを必須の要件としているが、Deci らの場合は必須というほどの関係は示唆されていない。

さらに Deci らは (e.g., Moller et al., 2006.), この基本的欲求が満たされていることで成り立つセルフ・エスティームとして真のセルフ・エスティーム (true self-esteem) という概念を提起している。彼らによる真のセルフ・エスティームとその対立概念である随伴的セルフ・エスティームは先述したとおりである。本論文では、Deci らと山崎の自律性に関連した概念を考慮しながら、この真のセルフ・エスティームに対して自律的セルフ・エスティーム (autonomous self-esteem) を、随伴的セルフ・エスティームに対して他律的セルフ・エスティーム (heteronomous self-esteem) を提起し再構築する案を提示する。この再構築の理由は以下のとおりである。まず、真のセルフ・エスティームは、その成り立ちからすれば内発的動機づけを含めて基本的欲求の充足を前提とするが、その内容を直接的に表現するため、山崎の見解から自律性に関連したセルフ・エスティームであることを明示する。そして、その対立する概念ということでは、自律に対して他律という用語が語義ならびに表現上適切である。さらには、真のセルフ・エスティームの「真の」という用語自体が日常的な語感が強く、内容を示さず、曖昧性をもたらしていることも別の用語を採用した理由である。これらのことを図示したのが図2である。こうして、自律的セルフ・エスティームは、セルフ・エスティームの視点、言い換えれば、自己信頼心や有能感の観点を強調して自律性の概念をとらえた用語となる。その直接的な定義は真のセルフ・エスティームとほぼ同様になるが、山崎や Deci らの自律性に関連した要素がすべて揃う特性となる。

そして今回の自律的セルフ・エスティームは、真のセルフ・エスティームに増して強調される点がある。それは、非意識性 (nonconsciousness) の観点である。前節でも説明したが、図2に示されているように、この自律的セルフ・エスティームは意識上で回答する自己報告式の質問紙ではとらえることはできず、非意識のままとらえなければその内容を知ることができないことを強調しておきたい。この点は、Deci らの真のセルフ・エスティームの定義時にも示唆されているが、非意識的であることは明示されていない。なお、この点では、他律的セルフ・エスティームは随伴的セルフ・エスティームとは異ならず、意識的にとらえることができる度合いが高くなる。それは自己報告式の質問紙の問題と限界の説明時にすでに示しているように、他者比較に鋭敏なこのセルフ・エスティームが具体的で露わな行動に出やすいことによる。

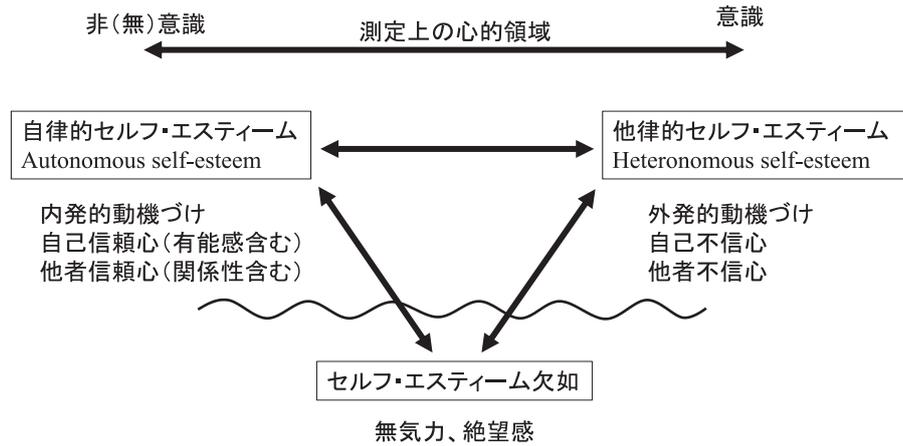


図2 自律的ならびに他律的セルフ・エスティームと測定上の心的領域

新概念の構築におけるインプリシット・セルフ・エスティームとその測定法としてのIAT

自律的なセルフ・エスティームが自己報告式の質問紙などによる意識上での回答で測定できないものとする、非意識において測定する何らかの方法が必要になる。非意識的な方法と言えば投影法や半投影法があり、それらは一部セルフ・エスティームの測定にも使用されてきた(e.g., Ackerman, Hilsenroth, Clemence, Weatherill, & Fowler, 2001)。しかし、投影法はいずれも実施と評価に時間がかかり、また客観性にも欠ける。さらには、投影法のほとんどは個別検査であり、集団での一斉実施には適さない。Ziller (1973) の横並びの円に自分や他者を位置づけるという変わり種の検査もあるが、社会的セルフ・エスティームを対象にしていることと、妥当性を中心に尺度自体に問題が指摘されている(井上, 1992 参照)。

学校においてすべての子どもに実施するとなると、別の方法が必要になる。そこで登場するのが、近年活況を帯びているインプリシット(潜在的, implicit)の概念とそれに関連した新たな測定法である。現在、インプリシットな心的特徴は、様々な態度(e.g., Lane, Mitchell, & Banaji, 2005)、セルフ・エスティーム(e.g., Bosson, Brown, Zeigler-Hill, & Swann, 2003)、感情(e.g., Quirin, Kazén, Rohmann, & Kuhl, 2009)、人生満足感(e.g., Jang & Kim, 2011)など多様な領域でその適用が確認される。インプリシットな心的特徴の定義は山崎・内田・横嶋・内山(2016)に詳しいが、定義の細部は研究者により、また研究領域によって異なっているのが現状である。その共通認識は、まず、非意識領域にある特性であることである。それが無意識か前意識かは見解が分かれ、前意識とする見解が主流のようであるが、近年の無意識の機能の大きさから考えると当然のことながら無意識にもかかわっていると考えられる。少なくとも非意識領域にあることから、そのまま非意識領域で測定できれば自律的なセルフ・エスティームの歪みのない測定ができる可能性がある。なお、従来の自己報告式の質問紙で測定される心的特性は、エクスプリシット(顕在的, explicit) 心的特性と呼ばれる。

そして近年、このインプリシットな特性を測定できる方法が開発され、インプリシット連合テスト(Implicit Association Test: IAT, Greenwald & Banaji, 1995)と呼ばれている。IATについては潮村(2016)に概説があるが、測定したい対象への態度等の測定を、当該対象と評価内容(良し悪しや好き嫌いなど)との連合を本人が意識しない状況で自動的に測定する方法をとる。IATは本来PCを使用して個別に実施される測定法であるが、紙筆版として集団で実施可能な方法も開発されている(e.g., Lane et al., 2005)。そしてこのIATがセルフ・エスティームの測定にも利用されていることは上述したとおりであるが、この子ども用の測定法になると個別での実施測定例がある(e.g., Baron & Banaji, 2006)、集団で実施できる紙筆版、とりわけセルフ・エスティームの児童用の紙筆版は著者らの知るかぎりない。

セルフ・エスティームは非意識状態で測定する必要があること、学校での使用、とりわけ問題の予防を目指した場合の使用ではクラスの全成員等に集団で一斉に実施する方法が必須になる。この背景から、最近、横嶋・内山・内田・山崎(印刷中)は児童用紙筆版のセルフ・エスティームIATを開発し、信頼性と妥当性の確認を経て使用可能な測定法を完成している。横嶋らの測定法は妥当性の検討が周到で、学校クラスの担任に個別に評定とインタビューを実施し、自律的セルフ・エスティーム得点が高い児童ならびに低い児童がその概念の高低に合

う特徴をもっているかどうかを検討する方法をとっている。この方法で測定されたセルフ・エスティームは、これまでの知見と同様に (Jordan, Spencer, Zanna, Hoshino-Browne, & Correll, 2003; Zeigler-Hill, 2006), 自己報告式質問紙で測定されたエクスプリシット・セルフ・エスティームとは無相関になることが報告されている (横嶋他, 印刷中)。この相関のない結果は, 本論文で指摘してきたように, これまでの自己報告式質問紙の結果が自律的セルフ・エスティームではなく, 他律的セルフ・エスティームならびに社会的望ましき等に歪曲された特徴を測定している可能性を示唆している。

新概念と新測定法を用いた今後の研究の展望

Baumeister らによってセルフ・エスティームのベネフィットが否定されたにもかかわらず, セルフ・エスティームの研究や教育は, とりわけ学校教育に関連した領域において根強い。学校教育は科学ではないとされる特徴の弊害が, このようなところにも出ている。このままセルフ・エスティームに関連した旧概念や測定法を用いて, 子どもたちのセルフ・エスティームを育成するような試みが続くと学校教育のみならず社会全体にとっての弊害と損失は測り知れない。そこでいち早く, セルフ・エスティームの新概念と測定法を駆使した研究や教育に切り替える必要がある。そこでの知見は, 健康や適応, それに学業遂行面においてセルフ・エスティームの役割を再興し, 真に子どもの発達に寄与することが期待される。

また, これまでの自己報告式質問紙によるセルフ・エスティームを他律的セルフ・エスティームの特徴の強い特性としてとらえれば, 自律的セルフ・エスティームとの比較, あるいは両者の特徴の高低を考慮して, セルフ・エスティームの多面性をとらえた上で健康や適応の問題を考えることができよう。近年インプリシットとエクスプリシット・セルフ・エスティームの交互作用を考慮した研究はすでに実施されているが (e.g., Kernis, Lakey, & Heppner, 2008; Spencer, Jordan, Logel, & Zanna, 2005), 本論文に示したように両セルフ・エスティームの概念的な違いを明確に区別した研究にはなっていない。

本論文では概念と測定法について論じたが, 実際に新概念に沿って子どもたちの自律的セルフ・エスティームを育成する方法にまでは踏み込むことができなかった。旧概念とその測定法を拠る所に展開されたこれまでのセルフ・エスティームの育成方法は, 大きな改善を迫られることになる。これまでの測定法は他律的セルフ・エスティームを測定していて, それを指標としてその向上をもって良しとする教育であったからには改善すべき教育であろうことは明白である。新たな教育は, 自律的セルフ・エスティームの概念と発達上の形成過程を考慮して, 無意識と意識の適切な交互作用のもと, 自律的セルフ・エスティームの育成を目指し, その測定結果の高低を教育効果指標とした教育であるべきである。最初に紹介したトップ・セルフと呼ばれる予防教育の一部はそのことを目指した教育であり, 自律的セルフ・エスティームを IAT で測定する方法 (横嶋他, 印刷中) の適用で教育効果を見る研究も開始されている。セルフ・エスティームの育成方法の抜本的な改訂とともに, 効果評価測定法も見直して, この領域の教育を適正化したい。

構成概念を扱う心理学の研究はむずかしい。その概念の規定が曖昧で多義性があり, また測定法の開発段階で想定された測定対象としての概念にさらなる歪みもたらされる。がむしやりに研究知見を出し始めた初期の研究こそ活況を浴びるが, やがて研究知見の不一致や混乱が見られる中, 最初の概念定義や測定法の問題が厳しく指摘され, その改善が見られることなく当該領域の研究が細って行く歴史が心理学では繰り返されてきた。これまでのセルフ・エスティーム研究も同じ過ちの軌道を描こうとしてきたが, 本論文の趣旨は, 潜在的に意義深い概念であるセルフ・エスティームの研究を埋没させることは避けたいという思いで貫かれており, その意味で, これまでの研究の批判に終始せず, 概念にしても測定法にしても代替案を出し, 今後の研究を明示したつもりである。

引用文献

- Ackerman, S. J., Hilsenroth, M. J., Clemence, A. J., Weatherill, R., & Fowler, J. C. (2001). Convergent validity of Rorschach and TAT scales of object relations. *Journal of Personality Assessment*, 77, 295–306.
- Bachman, J. G., & O'Malley, P. M. (1986). Self-concepts, self-esteem, and educational experiences: The frog pond revisited (again). *Journal of Personality and Social Psychology*, 50, 35–46.

- Bargh, J. A., & Chartrand, T. L. (1999). The unbearable automaticity of being. *American Psychologist*, *54*, 462–479.
- Baron, A. S., & Banaji, M. R. (2006). The development of implicit attitudes: Evidence of race evaluations from ages 6 and 10 and adulthood. *Psychological Science*, *17*, 53–58.
- Baumeister, R. F., Bushman, B. J., & Campbell, W. K. (2000). Self-esteem, narcissism, and aggression: Does violence result from low self-esteem or from threatened egotism? *Current Directions in Psychological Science*, *9*, 26–29.
- Baumeister, R. F., Campbell, J. D., Krueger, J. I., & Vohs, K. D. (2003). Does high self-esteem cause better performance, interpersonal success, happiness, or healthier lifestyles? *Psychological Science in the Public Interest*, *4*, 1–44.
- Baumeister, R. F., Smart, L., & Boden, J. M. (1996). Relation of threatened egotism to violence and aggression: The dark side of high self-esteem. *Psychological Review*, *103*, 5–33.
- Bednar, R. L., Wells, M. G., & Peterson, S. R. (1989). *Self-esteem: Paradoxes and innovations in clinical theory and practice*. Washington, DC: American Psychological Association.
- Bosson, J. K., Brown, R. P., Zeigler-Hill, V., & Swann, Jr., W. B. (2003). Self-enhancement tendencies among people with high explicit self-esteem: The moderating role of implicit self-esteem. *Self and Identity*, *2*, 169–187.
- Bowles, T. (1999). Focusing on time orientation to explain adolescent self concept and academic achievement: Part II. Testing a model. *Journal of Applied Health Behaviour*, *1*, 1–8.
- Branden, N. (1969). *The psychology of self-esteem: A revolutionary approach to self-understanding that launched a new era in modern psychology*. San Francisco: Jossey-Bass.
- Branden, N. (1992). *The power of self-esteem: An inspiring look at our most important psychological resource*. Deerfield Beach, FL: Health Communications, Inc.
- Bronson, P. (2007, February 11). How not to talk to your kids. Retrieved from <http://nymag.com/news/features/27840/>.
- Bushman, B. J., Baumeister, R. F., Thomaes, S., Ryu, E., Begeer, S., & West, S. G. (2009). Looking again, and harder, for a link between low self-esteem and aggression. *Journal of Personality*, *77*, 427–446.
- California State Department of Education. (1990). *Toward a state of esteem. The final report of the California Task Force to promote self-esteem and personal and social responsibility*. Sacramento, CA: Bureau of Publications, California State Department of Education.
- Coopersmith, S. (1967). *The antecedents of self-esteem*. San Francisco: W. H. Friedman and Company.
- Davies, J., & Brember, I. (1999). Reading and mathematics attainments and self-esteem in years 2 and 6 — an eight-year cross-sectional study. *Educational Studies*, *25*, 145–157.
- de Gelder, B., Tamietto, M., van Boxtel, G., Goebel, R., Sahraie, A., van den Stock, J., Stienen, B. M. C., Weiskrantz, L., & Pegna, A. (2008). Intact navigation skills after bilateral loss of striate cortex. *Current Biology*, *18*, R1128–1129.
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (1995). Human autonomy: The basis for true self-esteem. In Kernis, M. H. (Ed.), *Efficacy, agency, and self-esteem* (pp. 31–49). New York: Plenum Press.
- Dehaene, S. (2014). *Consciousness and the brain: Deciphering how the brain codes our thoughts*. New York: Brockman, Inc. 高橋 洋(訳) (2015). 意識と脳 — 思考はいかにコード化されるか — 紀伊國屋書店
- Diener, E., & Diener, M. (1995). Cross-cultural correlates of life satisfaction and self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, *68*, 653–663.
- Dijksterhuis, A., Chartrand, T. L., & Aarts, H. (2007). Effects of priming and perception on social behavior and goal pursuit. J. A. Bargh (Ed.) (2007). *Social Psychology and the unconscious: The automaticity of higher mental processes* (pp. 51–132). New York: Psychology Press.
- Donnellan, M. B., Ackerman, R. A., & Brecheen, C. (2016). Extending structural analyses of the Rosenberg self-esteem scale to consider criterion-related validity: Can composite self-esteem scores be good

- enough? *Journal of Personality Assessment*, 98, 169–177.
- Eysenck, H. J. (1987). Personality as a predictor of cancer and cardiovascular disease, and the application of behavior therapy in prophylaxis. *European Journal of Psychiatry*, 1, 29–41.
- Eysenck, H. J. (1991). *Smoking, personality, and stress: Psychosocial factors in the prevention of cancer and coronary heart disease*. New York: Springer-Verlag.
- Furnham, A., & Cheng, H. (2000). Perceived parental behaviour, self-esteem and happiness. *Social Psychiatry & Psychiatric Epidemiology*, 35, 463–470.
- Garvie, C. T. (1979). *Focus of motivation in sport: A principle factor*. Unpublished dissertation, University of Alberta, Edmonton. Cited from Robinson, T. T., & Carron, A. V. (1982). Personal and situational factors associated with dropping out versus maintaining participation in competitive sport. *Journal of Sport Psychology*, 4, 364–378.
- Goldman, B. M. (2006). Making diamonds out of coal: The role of authenticity in healthy (optimal) self-esteem and psychological functioning. In M. H. Kernis (Ed.), *Self-esteem: Issues and answers* (pp. 132–139). New York: Psychology Press.
- Greenwald, A. G., & Banaji, M. R. (1995). Implicit social cognition: Attitudes, self-esteem, and stereotypes. *Psychological Review*, 102, 4–27.
- Grossarth-Maticek, R., Eysenck, H. J., & Vetter, H. (1988). Personality type, smoking habit and their interaction as predictors of cancer and coronary heart disease. *Personality and Individual Differences*, 9, 479–495.
- 林みどり (2004). 子どもの自尊感情「子ども用5領域自尊心尺度」邦訳版の検討 石川看護雑誌, 1, 25–29.
- Heatherton, T. F., & Wyland, C. L. (2003). Assessing self-esteem. In S. J. Lopez, & C. R. Snyder (Eds.), *Positive psychological assessment: A handbook of models and measures* (pp. 219–233). Washington, DC: American Psychological Association.
- 井上祥治 (1992). セルフ・エスティームのその他の測定法の展開 遠藤辰雄・井上祥治・蘭 千壽 (編) セルフ・エスティームの心理学 — 自己価値の探究 — (pp. 37–46) ナカニシヤ出版
- 伊藤正哉・小玉正博 (2005). 自分らしくある感覚 (本来感) と自尊感情が well-being に及ぼす影響の検討 教育心理学研究, 53, 74–85.
- James, W. (1890). *The principles of Psychology* (Volume One). New York: Henry Holt and Company.
- Jang, D., & Kim, D-Y. (2011). Increasing implicit life satisfaction. *Social Behavior and Personality*, 39, 229–240.
- Jordan, C. H., Spencer, S. J., Zanna, M. P., Hoshino-Brwone, E., & Correll, J. (2003). Secure and defensive high self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, 85, 969–978.
- Kaplan, H. B., & Pokorny, A. D. (1969). Self-derogation and psychosocial adjustment. *Journal of Nervous and Mental Disease*, 149, 421–434.
- Kernis, M. H. (2003). Toward a conceptualization of optimal self-esteem. *Psychological Inquiry*, 14, 1–26.
- Kernis, M. H., Lakey, C. E., & Heppner, W. L. (2008). Secure versus fragile high self-esteem as a predictor of verbal defensiveness: Converging findings across three different markers. *Journal of Personality*, 76, 477–512.
- Lane, K. A., Mitchell, J. P., & Banaji, M. R. (2005). Me and my group: Cultural status can disrupt cognitive consistency. *Social Cognition*, 23, 353–386.
- Libet, B., Wright, Jr., E. W., Feinstein, B., & Pearl, D. K. (1979). Subjective referral of the timing for a conscious sensory experience: A functional role for the somatosensory specific projection system in man. *Brain*, 102, 193–224.
- Massimini, M., & Tononi, G. (2013). *Nulla di più grande: Dalla veglia al sonno, dal coma al sogno. Il segreto della coscienza e la sua misura*. Milano: Baldini & Castoldi. 花本知子 (訳) (2015). 意識はいつ生まれるのか — 脳の謎に挑む統合情報理論 — 亜紀書房
- Mimura, C., & Griffiths, P. (2007). A Japanese version of the Rosenberg Self-Esteem Scale: Translation and equivalence assessment. *Journal of Psychosomatic Research*, 62, 589–594.

- Moller, A. C., Friedman, R., & Deci, E. L. (2006). A self-determination theory perspective on the interpersonal and intrapersonal aspects of self-esteem. In M. H. Kernis (Ed.), *Self-esteem: Issues and answers* (pp. 188–194). New York: Psychology Press.
- Murell, S. A., Meeks, S., & Walker, J. (1991). Protective functions of health and self-esteem against depression in older adults facing illness or bereavement. *Psychology and Aging*, 6, 352–360.
- 中山勘次郎・西山康春・柳澤 登 (2011). 児童用自尊感情尺度の検討 上越教育大学研究紀要, 30, 63–74.
- 鳴門教育大学予防教育科学センター (2013). 予防教育科学に基づく「新しい学校予防教育」(第2版) 鳴門教育大学
- Paulhus, D. L. (1984). Two-component models of socially desirable responding. *Journal of Personality and Social Psychology*, 46, 598–609.
- Pope, A. W., McHale, S. M., & Craighead, W. E. (1988). *Self-esteem enhancement with children and adolescents*. New York: Pergamon Press. 高山 巖 (監訳), 佐藤正二・佐藤容子・前田健一 (訳) (1992). 自尊心の発達と認知行動療法 岩崎学術出版
- Pottebaum, S. M., Keith, T. Z., & Ehly, S. W. (1986). Is there a causal relation between self-concept and academic achievement? *Journal of Educational Research*, 79, 140–144.
- Richardson, C. G., Ratner, P. A., & Zumbo, B. D. (2009). Further support for multidimensionality within the Rosenberg self-esteem scale. *Current Psychology*, 28, 98–114.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Quirin, M., Kazén, M., Rohrman, S., & Kuhl, J. (2009). Implicit but not explicit affectivity predicts circadian and reactive cortisol: Using the Implicit Positive and Negative Affect Test. *Journal of Personality*, 77, 401–425.
- Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2000). Self-determination theory and the facilitation of intrinsic motivation, social development, and well-being. *American Psychologist*, 55, 68–78.
- Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2002). Overview of self-determination theory: An organismic dialectical perspective. In E. L. Deci & R. M. Ryan (Ed.), *Handbook of self-determination research*. Rochester, NY: University of Rochester Press.
- Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2006). Self-regulation and the problem of human autonomy: Does psychology need choice, self-determination, and will? *Journal of Personality*, 74, 1557–1585.
- Scheirer, M. A., & Kraut, R. E. (1979). Increased educational achievement via self-concept change. *Review of Educational Research*, 49, 131–150.
- 潮村公弘 (2016). 自分の中の隠された心 — 非意識的態度の社会心理学 — サイエンス社
- Skaalvik, E. M., & Hagtvet, K. A. (1990). Academic achievement and self-concept: An analysis of causal predominance in a developmental perspective. *Journal of Personality and Social Psychology*, 58, 292–307.
- Sowislo, J. F., & Orth, U. (2013). Does low self-esteem predict depression and anxiety? A meta analysis of longitudinal studies. *Psychological Bulletin*, 139, 213–240.
- Spencer, S. J., Jordan, C. H., Logel, C. E. R., & Zanna, M. P. (2005). Nagging doubts and a glimmer of hope: The role of implicit self-esteem in self-image maintenance. In A. Tesser, J. V. Wood, & D. A. Stapel (Eds.), *On building, defending, and regulating the self: A psychological perspective* (pp. 153–170). New York: Psychology Press.
- 田中道弘 (2008). 自尊感情における社会性, 自尊感情形成に際しての基準 — 自己肯定感尺度の新たな可能性 榎本博明・岡田 努・下斗米淳 (監修) 自己心理学6 下斗米淳 (編) 社会心理学へのアプローチ (pp. 27–45) 金子書房
- 内田知宏・上埜高志 (2010). Rosenberg 自尊感情尺度の信頼性と妥当性の検討 — Mimura & Griffiths 訳の日本語版を用いて — 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 58, 257–266.
- Walker, J., & Bright, J. (2009). Self-esteem and violence: A systematic review and cognitive model. *Journal of Forensic Psychiatry and Psychology*, 20, 1–32.
- 山崎勝之 (2013). トップ・セルフの教育目標 鳴門教育大学予防教育科学センター 予防教育科学に基づく「新

- しい学校予防教育」(第2版)(pp. 17-47) 鳴門教育大学
- 山崎勝之(2015). 「学校予防教育」とは何か 鳴門教育大学
- 山崎勝之・倉掛正弘・内田香奈子・勝間理沙(2007). うつ病予防教育 — 小学校から始めるメンタルヘルス・プログラム — 東山書房
- 山崎勝之・内田香奈子・横嶋敬行・内山有美(2016). 無意識と意識, そして, インプリシット心的特徴 鳴門教育大学研究紀要, 31, 1-18.
- 横嶋敬行・内山有美・内田香奈子・山崎勝之(印刷中). 児童用の紙筆版自尊感情潜在連合テストの開発 — 信頼性ならびに Rosenberg 自尊感情尺度と教師による児童評定を用いた妥当性の検討 — 教育実践学論集, 18.
- Zeigler-Hill, V. (2006). Discrepancies between implicit and explicit self-esteem: Implications for narcissism and self-esteem instability? *Journal of Personality*, 74, 119-143.
- Ziller, R. C. (1973). *The social self*. New York: Pergamon.
- Ziller, R. C., Hagey, J., Smith, M. D., & Long, B. (1969). Self-esteem: A self-social construct. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 33, 84-95.

Reconstruction of the concept and measuring method of self-esteem: Toward innovatively reborn research of self-esteem

YAMASAKI Katsuyuki*, YOKOSHIMA Takayuki** and UCHIDA Kanako*

(Keywords : self-esteem, autonomy, nonconsciousness, measurement, implicit psychological characteristics)

Self-esteem is one of the most prevalent psychological characteristics as a target to improve in various situations such as schools or communities. However, it seems likely that at the beginning of this century, scientific attempts for determining whether self-esteem is really beneficial for health, adjustment, and performance came to an conclusion that it would produces no such beneficial effects. Nevertheless, research and education regarding self-esteem is still now being widely conducted in many countries. Considering the current confused conditions, the present study reconsidered the concept of self-esteem, along with its measurement methods. First, the previous main concepts of self-esteem were reviewed, focusing on Rosenberg's works. The reviews showed that many different concepts have thus far been established and utilized. Moreover, it became clear that even if the most widely accepted concept by Rosenberg is right, his scale for assessing his concept which has been most widely and frequently utilized is unable to accurately measure his own concept. Next, in order to establish a new concept of self-esteem after indicating varied faults of extant self-esteem's concepts, the nonconscious functions that have been revealed as the most powerful factors to determine human behaviors in recent research of brain science and psychology, along with the concepts of true self-esteem by Deci and colleagues and secure high self-esteem by Kernis, were introduced. Thereafter, the authors discussed that the concept of self-esteem needs to be considered in terms of nonconsciousness, underscoring that it cannot be assessed utilizing consciously answered measures such as self-reports, which lead to the introduction of the concept of "autonomous self-esteem" contrasted with "heteronomous self-esteem." In line with this consideration, the authors depicted a new implicit association test that is administered to groups of children to measure nonconscious autonomous self-esteem. Thus, new research and school education with respect to this new concept and measurement tool is ready to start, hopefully revising the present world of self-esteem in terms of both research and education.

*Department of Human Development, Naruto University of Education

**Joint Graduate School in Science of School Education, Hyogo University of Teacher Education